



～‘学 び’について～

今年度のいわき市総合教育センター教育実践発表大会を、1月19日に開催します。昨年度は「今こそ、教育の力を」というテーマのもと、次の世代を担う子どもたちを力強く育てていくために何が必要かについて‘心のケア’を中心に位置づけました。

今年度は、‘学び’について皆さんとともに考えたいと、‘ともに学ぶ～いわきの未来 子どもたちのために～’をテーマとして開催します。内容については、午前中はいわき生徒会長サミット報告や自主活動団体による発表・展示、午後は日本の教育をリードされてきた佐藤学先生にご講演いただきます。多くの先生方の参加をお願いします。

では、ここで佐藤学先生のお考えを少し紹介します。
【「初等教育資料」子どもと教育より】

—先生の考える質の高い学びとは？—

M: 質の高い学びの条件とは、

- 活動的で協同的で反省的な学び(対話の要素があること)
 - 真正の学び(内容面での本質性があること)
 - 高いレベルに挑戦していること
- です。ただし、この質の高い学びというのは、それぞれの先生が自分の中でつくり上げるものだと思います。

—具体的にはどのような授業か？—

M: まず教室に行きますね。そうすると、子どもたちが聴き合う関係ができているかどうか大切です。学びは聴くことからスタートすると思うのです。そういう子どもたちが育つ教室というのは、必ず聴き上手の先生がいるのです。子どもの声やつまづきに絶えず耳を澄ましているような、そういう教師がいる。

次には、一人一人の出たきた考えを子ども同士がつないでやっているかどうか。また教師自身もつないでいけているかどうかです。さらには、誰かがわかったからといって、どんどん進むのではなく、いつもみんなのところに戻していける。わかったということの根拠に戻していけるかどうかです。この「聴く、つなぐ、戻す」ということが授業の中でも成立しているかどうか。そしてまた、教科の本質に沿っているかどうか。あるいは子どもたちのつまづきが一体どこで起こっているかということ、それが学びが成立するための条件だと思っています。

「子ども健康教育相談」から

小4頃から始まる、前思春期の女子児童の不登校の相談が増えています。

この時期、男子児童より早熟傾向がみられる女子児童には自我のめざめが始まっています。

それまでは親の言うことに従っていた子が、何らかのきっかけによって自信喪失に陥ってしまうことがあります。

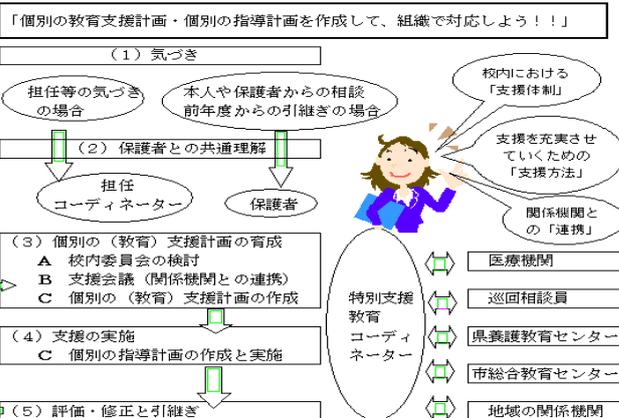
特に、他の子ができていることが自分にできていないと感じてしまった時に起きるようです。

その中には身辺自立に関わるが含まれています。

親がかいがいしく世話をし、自分が敷いたレールにだけ乗せようとしてきたことが引き金になっているように思えるのです。

特別支援学校参観講座より

子どもの困り感への対応について 講座資料から



子どもたちの心のケアについて

大震災から1年あまり経過し、急性ストレス障害が表れる期間は過ぎたが、遅発性であるPTSDの児童生徒が症状を表す時期となった。専門家による治療と、保護者や学校関係者によるケアの役割分担が重要になる。

観察のポイント

- ・ より重いタイプのPTSD症状として、意識が目の前から遊離し、現実感が低下する「解離型」がある。
- ・ 被災時の年齢が低いほど起きやすく、他の症状とともに表れると、「反応が鈍くなった」「ぼうっとしている」と見た目には映り、気付かれないことが多いため目立つ症状以上に注意して観察する。

保護者から見た震災後の子どもの様子 文科省調査(H24. 5) (%)

	全体	岩手県	宮城県	福島県
よく甘えるようになった	10.7	7.7	13.7	17.4
物音に敏感になったり、イライラするようになった	9.1	6.9	11.4	16.5
災害を思い出すような話題やニュースになると、話題を変えたり、その場から立ち去ろうとする	6.2	5.3	9.5	8.9
無表情でぼんやりすることが多くなった	1.5	0.9	1.8	3.6